

旅人馬 たびびとうま

鹿児島県

昔むかし、金持ちの子とまづしい家の子が兄弟のようになかよくなりました。

あるとき、ふたりは遠い国へ旅に出ることになりました。どんどん歩いていくうちに、日が暮れてしまいました。すると、宿屋があつたので、ふたりはそこに泊りました。

ふたりは、六畳敷の部屋に寝かされました。まづしい家の子はなかなか寝られませんでした。目をあけて、いろいろのほうを見ていると、夜中ごろ、宿屋のおかみさんが入ってきました。そして、いろいろの灰を、まるで田をたがやすようにかきませて苗代を作り、稻のものをまきました。すると芽が出て稻がのびたので、田植えをしました。田の草取りをしていると稻の穂が出ました。そこで稻刈りをして、もみすりしてつくと、米になりました。おかみさんは、それで餅を作つて部屋から出でていきました。

ふしぎなこともあるもんだと思つてゐるうちに夜が明けました。

おかみさんがふたりを起こしにきて、

「朝^{あさ}はんができました」といつて、お茶とおいしそうな餅を出してくれました。まづしい家の子は、そっと金持ちの子のそばにより、ひざをつねつて、

「あの餅、食べちやだめだよ」と小さい声でいいました。ところが、金持ちの子は気づかずに、餅を食べてしました。

ひとつめを食べるまでは何ともなかつたのですが、ふたつめを食べたとたん、金持ちの子は馬になつてしましました。馬は、涙^{なみだ}をたらたら落として泣^なきました。まづい家の子は、

「おれがあれほどひざをつねつて教えたのに。でも、きつともとの人間にもどしてやる。しばらくしんぼうして待つていてくれ」といつて、馬になつた友だちとわかれ宿を出ました。

男の子は、長いあいだ、あちらこちら旅してまわりました。

ある日のこと、七十歳ばかりの白髪のおじいさんに会いました。男の子が、「おじいさん、おじいさん。教えていただきたいことがあります」というと、おじいさんは、

「何が知りたいんだ」とききました。

「じつは、宿屋のおかみさんがいろいろの灰で米を作り、その餅を食べた私の友だちが馬になつてしましました。どうしたら友だちをもとの人間にもどすことができるか、教えてもらえませんか」

すると、おじいさんはいいました。

「よしよし、教えてやろう。この道を行くと、一反畠に一反のなすを植えたところがある。そのなかの、東がわに実のなつた一本から実を七つとつてきて、その馬に食わせるといい」

男の子は、

「ありがとうございました」とお礼をいって、道を進んでいきました。

しばらく行くと、一反畠に一反のなすを植えたところがありました。けれども、どんなにさがしても、東がわに四つ実のなつた木はあっても、七つ実のなつた木はありませんでした。

そこで、また先へ歩いていきました。すると、また一反畠に一反のなすを植えたところがありました。そこには五つ実のなつたものしかありませんでした。

また先へ行くと、そこには六つ実のなつたものしかありませんでした。

どんどん歩いていくと、ようやく、一本に七つ実のなつたなすの木がありました。

「これだ、これだ」

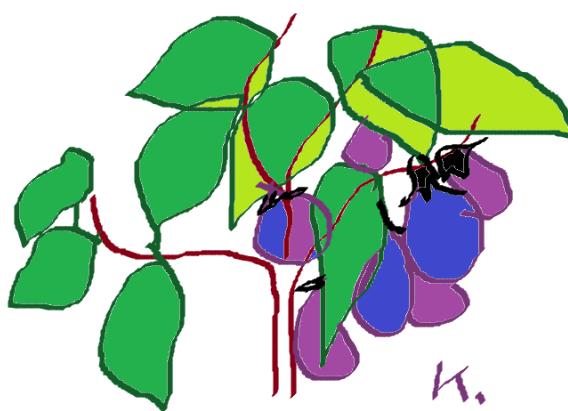
男の子はおおよろこびでなすを七つもぎ取ると、いつも早く友だちを助けようと、走つてもどりました。

宿屋に着くと、馬になつた金持ちの子は、おかみさんに引かれて田んぼへ行くところでした。よく見ると、馬の背中は傷だらけです。おかみさんがそばをはなれたすきに、男の子は、

「さあ、きばつてこのなすを食べろ」といって、なすを馬に食わせました。馬は、四つまではサクサク食べましたが、五つめになると、

「もう食べきれないよ」といいます。男の子は、

「なにいうんだ。これを食わなければ、おまえはいつま



でも人間にもどれないぞ」と叱しかつて、またひとつ食わせました。馬は、なすをひとつ食べるたびに、いやがつて首を振りましたが、男の子はむりやり食べさせました。すると、七つめを食べたとたん、馬はもとの人間にもどりました。ふたりはそこをぬけだし、走つて家に帰りました。

家に着くと、金持ちの子の父親が、

「どうしてこんなに遅かったんだ」とききました。そこでふたりは、ふしぎな宿屋に泊まつて金持ちの子が馬にされたこと、まずい家の子がみつけた七つのなすを食べてもとにもどつたことを話しました。

金持ちの子の父親は、よろこんで、あるだけの財産ざいさんをふたつに分けて、ひとつをまずい家の子にくれました。そこで、まずい家の子も大金持ちになつたということです。

原話：『昔話研究一一四一』民間伝承の会

再話：村上郁